

の説叙の體裁はほゞ著者の舊著日本國民思想史乃至日本史學史等に同じい。事の現代に屬するものほゞより著者の重きをおく所でないではあらうが、西歐思潮の輸入を説ける章節に於いて一二人名の誤があり、其の思想の理解の上に如何と思はれる箇所認められるのは偶々不用意に出づる所か、敢へて以つて彪大なる大冊全體の輕重を問はるゝに至るが如きことなくんば幸である。(菊判七五六頁、定價五、五〇圓、東京中文館(以上柴田))

● 堺 市 史 第二・三・四・七卷

堺市史編纂部編

本誌昨年七月號に紹介せる第一、六、七卷三冊について第二、三、四、七卷四冊が新に出版された。本史の特長價值に就いては前回や、詳述する所があつたから各卷を逐ふて概略の紹介を試みたい。

第二卷は本編第二として、第一卷の第二回遣明船の堺歸着の後をうけて、第三回遣明船の出帆より豊臣氏の滅亡に至る間堺の最も光輝ある全盛期の姿が全幅的に展開

されてゐる。遣明船に於ける堺商人の活躍は延いて日明外交貿易の全歴史を跡づける事であり、海運上占むる勢力は交通商業の隆盛を思はせ商人の商行爲、風雅の記述は一興味ある色彩を與へてゐる。又永き戦亂中此町の平和と富とが如何に重要視されたか、其商業の發達と自治體の發達とによつて町の繁榮を見、次で斯る好適なる土地の事情によつて當時の戦亂の災禍から保護され又新に發生した文化の諸相が記述されてゐるが、此は單に堺に於いてのみならず全日本に於ける文化の傳統と發展の上に光輝ある一節である。佛教に於いては大徳寺の有力なる支持者として、異宗として追はれた一向、日蓮宗の避難所として大きな功積有つてゐるが、この事情は絶えざる迫害に苦んだ耶蘇教に取つても京畿布教の無二の根據地として重大な地位を示されてゐる。圖書出版に於ては醫書大全、論語如き特殊なるものゝ出版に異色があるが、茶湯に於て紹鷗より利休に至る茶湯の傳統が此町の人によつて受継ぎ發展されたものとして堺市民の最も誇りとするものを詳述してゐる。文藝に於ける堺傳授、隆達節の

如き注目さる、現象、醫術の流行、又外國文化輸入の上に於て最も注視さるべき鐵砲の傳來と其製造に對する堺人の貢獻が記されてゐる。

第三卷は第三、四の兩篇を含む。第三編爛熟期として大阪陣より明治維新に至る間の事柄が取扱はれる。大阪夏陣に蒙つた全燒の災禍から立上つた新市街の状態を元祿二年堺大繪圖を基として今日に至る迄の發展の基礎部分を詳述してゐる。これについて徳川幕府の嚴重なる統制の下に奉行組織、自治制度が確立されて行つた姿を辿り絲割符貿易、商工業に就いて前代の餘光の尙續ける繁榮を示し、所大和川開墾によつて蒙つた堺港の變遷、附近村落の變化の觀察は堺市の今日の狀態に至る經過を定むるものとして興味あるものである。次で宗教、教育と文藝、遊覽等市民の生活を描き、幕末に際しての活躍に終つてゐる。

第四編は整頓期として明治維新以後今日に至る迄が明治初年、堺區の時代、市制實施以後、最近の市勢の下に市政、戸數人口、産業交通、文藝等市民に取つて尙近き

思ひ出であるものを詳述して親しみを起させる。

第四卷は資料編第一として主として未刊行の重要なものゝみが黎明期、全盛期の資料が、前者は交通、堺莊、社寺、戰爭、人物の各資料として、後者は外國交通、戰爭、堺莊、商工業、宗教、茶道、學藝の各資料に分類されてゐる。

第七卷は別編として第一人物誌、第二神社寺院教會誌、第三編名蹟誌の各々の下に豊富な事項の簡要なる説明があつて便利な參考書である。

尙索引年表等一冊未刊のものを残してゐるが本文は全七冊を以て完成を告げた。中世以降に於ける此町の他市に比類なき文化活動を見る事はまた全日本の文化の歴史の主潮をさぐる事である。堺市が其光榮ある歴史編纂の爲多大の犠牲を拂ひ此處に其業を完成された事は市の最も誇すべき所であらう。(菊判第二卷六〇七頁、第三卷一二五頁、第四卷四六九頁、第七卷八九八頁、堺市役所發行)〔藤〕